



様式第4号 (第6条関係)

平成 28 年 8 月 25 日

富士見市議会議長 津波 信子 様

会 派 名 富士見市民ネットワーク
代 表 加藤 久美子

行政視察・研修 (政務活動) 報告書

下記のとおり、行政視察・研修 (政務活動) を実施しましたので、報告いたします。

記

1 期 間 平成 28年 8月 20日～ 28年 8月 21日 (1 泊 2 日)

2 参加者名 加藤 久美子

3 場所 (行政視察地・研修場所)

会場：ホテル福島グリーンパレス

住所：福島市太田町13番53号 Tel.024-533-1171

4 調査・研修概要

8月20日 (土) シンポジウム

第4回福島を忘れない！全国シンポジウム

講演

「福島第一原発事故 その時浪江町は」 浪江町長 馬場有氏

講師の話は福島には今2つの風が吹いているという指摘から始まった。

1つは原発事故がなかったような風化、もう1つは福島県産への風評被害である。

浪江町原発被害についてはパワーポイントによる説明があった。
以前は約19,000世帯が住んでいたが事故後は1,100世帯が移転、特に請戸地区は600棟中580棟が流失した。182人死亡31人行方不明。さらに震災関連死384人、転居は6回から多い方で14回避難に伴いさせられた。避難先は44都道府県、約600市区町村に及び、子どもは全国590校に分散している。

今年の成人式には240人が新成人となり、そのうち210人が全国から集まった。浪江町は東京電力と通報連絡協定を締結しており、東電職員が頻繁に来庁し事故前日にも来ていたが原発事故当日以降、まったく情報提供がなかった。消防団は無線で情報を得ていたので事故や避難について教えられた。

今後は協定についての見直し、事故の徹底的な原因究明、検証が必要である。
最後に馬場町長はこれまで原子力発電の賛成派で推進してきたが、ひとたび事故が起きれば悲惨な結果となることがよく分かった。今後は絶対反対する。

報告

- ① 「避難解除地区の現状は」 川俣町議会議員 菅野誠一氏
- 川俣町は原発から40キロ離れた地域で、山木屋地区は2017年4月に避難解除となった。1,510人が避難し、そのうち127人が帰宅意思を明らかにしている。
- 農地は表土を栄養分の豊富な5センチ剥ぎ取り、その上に川砂で客土をした。さらにそこは除染廃棄物75万トンがフレコンバッグで3段重ねに積み上げられている。
- 中間貯蔵地として交渉が進められている所がすぐ目の前にあり、豊かな農産物が育った所に、東京電力の緊急事態宣言が解除されないままになっている。現在1.6ミリシーベルト/hで個人賠償も不満足な提示しかされていない。
- ② 「原発立地の町村は」 双葉町元養蜂業者 小川貴永氏
- 96%が帰宅困難地域で、中間貯蔵予定地。除染作業と防波堤の嵩上げ工事が進められている。4%が準備地域で緑肥植物を植えている。
- 私は公共福祉の乱用で個人の権利の侵害と考える。行政、町議会議員も事故後の避難場所、町民の失業問題や生活再建について考えていない。
- 家屋は5年間の放置の結果泥棒、野生動物の被害で住むことができない状態に

ある。

原子力避難者訴訟で司法の場で闘うことにした。

③ 「避難解除の村は」 川内村議会議員 志田篤氏

予算規模32億円に対し、復興のためと国から助成金が来るがまったく議会審議なしが当たり前になっている。

これが住民の生活再建になっているのか疑問で、私は仮設住宅に住みNPO法人をつくり、自治町会長をやっているが賠償が18ヶ月で終了し高齢者の多い中で厳しい状況にある。

2年前に仮設住宅で食べるコメがないとマスコミに訴え、NHKニューススペシャルで「米をください」が放送され、賠償格差が大きいと感じさせられた。自主避難者は全国で2万人以上になり、仮設入居者は高齢化し「仮設に住みつづけたい」と意向を出している。とりあえず帰れる人から帰ろうと今後の方向性は出しているが、今でも中間空気線量が下がらず低線量の被ばくに対し不安である。

今年7月25日に、早稲田大学の坪内卓也教授の講演では心理性外傷的ストレスが問題と言っている。悩みが深い。

④ 「避難解除後の町は」 檜葉町 金井直子氏

10年前に母の実家に父とUターンし、原発事故に遭遇した。

狭いアパートでの避難生活によるストレスで衰弱、心の復興ができない。

避難指示解除がされたが8月4日現在、帰還率は8.4%、65～69歳が人数的に最も大きい。現在の線量は平均8.77マイクロシーベルト/hで3世代、4世代で生活してきた生活が一家離散、親戚、知人関係も壊されてしまった。

⑤ 「大熊町の現状」 大熊町議会議員 木幡ますみ氏

国は中間貯蔵施設と言っているが最終処分施設になりかねないを考える。

また予定地地主に対して提示された30年の借用期間の借地料は、遠隔地の現場を知らない土地家屋士による査定で不当に低く抑えられている。

土壌検査が必要で福島第一原子力発電所の排気塔周辺は10シーベルト/hで放射線管理区域5マイルロシーベルト/hと比べ高い線量で大変な問題だ。

大野駅の砂利の線量は8.7マイクロシーベルト/h、踏み面の側は5～6マイ

クロシーベルト/hの高さで危険である。しかし除染の予定はない。
除染の限界があり、線量そのものが高く居住の可能性が危いと話があった。

記念イベント

「ふくしまの今」

「おしどり」マコ&ケン

本人曰く「原発お笑い」といわれているようで、このシンポジウムにふさわしい公演だった。

マコ&ケンが吉本興業東京に所属し、マコが元化学を専攻していたので3月11日以降の東電のマスコミ向け定期記者会見を傍聴し疑問を持ったことがきっかけで今日まで追っかけの日々が始まりました。

今では世界的な原子力関係機関の大会、専門家の集まりにまで招待状が来るようになったとか。さらに公安調査庁の尾行までつき、ライブには公安割引まで出し、笑いを取ったと話があった。

8月21日（日）現地視察

ホテル前に集合、7時30分に出発

福島市→飯館村役場（現地で飯館村議会の渡辺議員から説明）モニタリングポストの放射線量は0.37～0.40マイクロシーベルトで高い。

周辺にクリニック、特別養護施設があるが100床のところ職員不足で40床しか入所できていない。

南相馬市→浪江町請戸地区（請戸浜で福島県教育委員会職員横山さんから話を聞く）第一原発から4.5kの距離で、浜から建物がよく見えた。
地震前は自身も住んでいた所で、津波で両親を亡くし1ヶ月後に発見という悲惨な体験をされた。

国道6号線を走行。線量が高く、停止することができない双葉町、大熊町を通過。モニタリングポストは0.6以上の数値で、皆さんが車中に持ち込まれている線量計はそれより高いと話していた。

楢葉町、広瀬町を通過、いわき市の四倉で休憩し一息入れました。

車中では新藤、有賀さんから説明を受けました。

その後福島駅で解散。

5 感想及びまとめ

今回の議員研修は浪江町馬場町長をはじめ地元町村議会議員が45人以上、県民、県外の議員が約100人で参加者は総数150人になりました。

20日に報告で聞いた町村の被害状況、まだまだ高い線量の中で国・県から帰還が進められ、農地に中間貯蔵施設が既成事実化されている状況に苛立ちが募らせている。避難者訴訟に踏み切る方々の発言を聞く機会になりました。

バスの走行とともに原子力発電所が垣間見え、事故収束の見通しも見えず、そこに暮らす人々の生活再建もできないことをもっと多くの人に知ってもらうために何をしたらよいか。

重い課題を突き付けられました。

今回の福島第一原子力発電所の事故は、ひとたび事故が起きれば生命、財産など人々の生活は脅かされ、取り返しがつかない事態になることを認識しなければなりません。何より子どもたちの生命、健康を守らなければなりません。

馬場浪江町長の言葉に、悔やんでも悔やみきれないとありました。今回の事故を教訓にし、福島を忘れてはいけないと肝に銘じる研修となりました。

*行政視察に関する調査書、概要、参考資料等は、会派にて保管